

社会参加を促した総合的学習の実践におけるクロスカリキュラム開発の実際 —愛知県西尾市立西尾小学校の「町づくり総合学習」の場合—

白井 克尚* 小栗 優貴** 土屋 武志***

* 愛知東邦大学

*** 愛知教育大学非常勤講師

**** 社会科教育講座

Practice of Cross-Curriculum Development in Comprehensive Learning that Encourages Civic Participation : In the Case of "Comprehensive Town Development Learning" at Nishio Elementary School

Katsuhisa SHIRAI*, Yuki OGURI** and Takeshi TSUCHIYA ***

* *Aichi Toho University, Nagoya 465-8515, Japan*

** *Part-time Lecturer, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan*

*** *Department of Social Studies, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan*

要約 本稿の目的は、社会参加を促した総合的な学習の時間の実践におけるクロスカリキュラム開発の取り組みに着目し、そこで用いられた論理と実際について事例分析を通じて明らかにすることである。本稿の分析を通じて明らかになった点は、以下の三点である。第一に、西尾小の「町づくり総合学習」におけるクロスカリキュラム開発の背景には、赤堀校長のリーダーシップのもと寺本より継続的に指導を受けたことや、教師たちの主体的な取り組みがあり、町づくりへの「子どもの参画」や、目指す具体的な子どもの姿としての「人や町との関わり方」の実現と結びついていたことである。第二に、西尾小の「町づくり総合学習」におけるクロスカリキュラムの論理は、各学年の単元レベルで、「学び方」の習得や「教科スキル」の活用が位置づけられていたことである。第三に、西尾小の「町づくり総合学習」のクロスカリキュラムの実際として、「町づくり」を目指した問題解決学習によって、子どもの「社会参加」を促していたということである。

キーワード： 社会参加, 総合的な学習の時間, クロスカリキュラム, 町づくり, 西尾市立西尾小学校
Keywords : Civic Participation, The Period of Integrated Study, Cross Curriculum, Town Planning, Nishio Elementary School

1. 問題の所在

本稿の目的は、社会参加⁽¹⁾を促した総合的な学習の時間（以下、総合的学習）の実践におけるクロスカリキュラム開発の取り組みに着目し、そこで用いられた論理と実際について明らかにすることである。

総合的学習において、社会参加が制度的目標として位置づいていることは周知の通りである。一方で、この社会参加といった目標は、総合的学習固有の目標とは言えない。なぜなら、そもそも学校教育の目標は、「平和的で民主的な国家及び社会の形成者（教育基本法第一条）」を目指しており、学校教育のあらゆる場面で、社会参加を育むことが求められるからである。

他方、総合的学習における社会参加の育成には、次の2つの点が、他にはない特徴となる。

1つ目は、社会参加カリキュラムを、クロスカリキュラムの発想で作りやすくなることである。クロスカリキュラムとは、「既存の教科や領域をいくつか組み合わせさせて作成した大単元、またはいくつかの大単元を配

列した計画であり、児童生徒の学習意欲の向上や、認識と行動の統一、さらに現代的なテーマに即した総合的な知識や技能の獲得をねらいとしているカリキュラム⁽²⁾と定義されるものである。主に、総合的学習において注目がなされおり、社会参加カリキュラムもこうした複数の教科の視点でデザインしやすくなる。

2つ目は、社会参加カリキュラムが、他教科目に比べて組織的に作られていくことである。総合的学習の場合、教科担当が1人で構想するのではなく、学年あるいは学校全体で組織的にカリキュラムを構想することになる。社会科等で行うよりも、より組織的に社会参加を促しやすくなる。

このように、総合的学習で育成する社会参加には、クロスカリキュラムという視点と組織的な視点が導入されやすい。さらには、この2つを活かしていくことこそが社会参加という目標論を総合的学習に位置付ける意義だとも言える。

では、クロスカリキュラムと組織的という2つの視

点を重視しつつ、社会参加を促す総合的学習をいかに設計すれば良いのだろうか。すでに、クロスカリキュラムの視点で組織的に総合的学習に取り組んだ実践研究として高階 (1996) (3)、今谷 (1997) (4)、田中 (2000) (5)による研究があるものの、具体的にどのように組織立てて社会参加カリキュラムが設計されていたのかが判然としていない。

以上の問題意識に基づき、本稿では、総合的学習におけるクロスカリキュラムの開発の事例を取り上げ、総合的学習におけるクロスカリキュラムは、いかなる論理に基づき開発されていたのか、また、そこでのカリキュラム開発の過程や実際は、どういったものであったかを明らかにしていく。

取り上げる事例は、総合的学習の創設期 (6) における愛知県西尾市立西尾小学校 (以下、西尾小) の「町づくり総合学習」(7)である。西尾小の「町づくり総合学習」に注目したのは、以下の二つの理由からである。

第一に、西尾小の「町づくり総合学習」が、歴史的意義をもつ取り組みだからである。この実践は、総合的学習の創設期に誕生した実践であり、学校は、組織として意図的・計画的にカリキュラムをデザインしなければならなかった。先行研究においても西尾小の「町づくり総合学習」に関しては、「子どもが地域の環境を調べ、改善に向けて行動を起こしていく『アクション・リサーチ』のモデルを西尾小学校は提案している」(8)として論じられている。よって、学校が組織的にゼロから構築した実践として学ぶところが大きい。

第二に、西尾小の「町づくり総合学習」が、『まちづくり』を学校教育全体の目標 (子どもは小さなまちづくり人) にまで高めた試み (9)であるとされ、「社会参加」を促した実践として捉えられるためである。「社会参加」の重要性については、社会科教育学の分野において唐木 (2008) (10)や長瀬 (2021) (11)、小栗 (2022) (12)がその重要性を指摘している。総合的学習のクロスカリキュラムにおいては、どのように「社会参加」が促されたのか、実践レベルでその実際を明らかにできると考えた。

この事例に関して、筆者らは、創設期の西尾小の「町づくり総合学習」に関する単元計画や実践記録等の資料を収集・分析し、補足的に関係者への聞き取り調査を行った。以降、その分析結果を示す。

2. 西尾小の「町づくり総合学習」への着手の背景

1996 (平成6)年7月、中央教育審議会第一次答申において「生きる力」を児童に育てていくためには、「生きる力」が全人的な力であるということ踏まえ、「一定のまとまった時間(以下、「総合的な学習の時間」と称する。)を設けて横断的・総合的な指導を行うこと」が提言された。1998 (平成10)年7月には、教育課程

審議会答申において、「今回の教育課程の基準の改善の趣旨を実現する極めて重要な役割を担う時間」として総合的学習の創設が提言された。つまり、総合的学習を創設する趣旨として、「各学校が地域や学校の実態等に応じて創意工夫を生かして特色ある教育活動を展開できるような時間を確保することである」という視点が示されたのである。総合的学習の創設により、カリキュラムのあり方を教師だけでなく、地域や学校とともに問い直すことが迫られたのである。そうしたときに、西尾小が「町づくり総合学習」に着手した背景には、以下の3つの要因があった。

第1に、赤堀隆校長のリーダーシップが存在していたためである。西尾小では、1995 (平成7)年度に赤堀校長が着任し、文部省指定エイズ教育全国大会を開催し、1996年度の愛知県家庭科教育研究会の愛知大会への準備を進めてきた。特に、教科指導では、「西尾城址」を生かした地域教材を掘り起こし、体験的学習を組むことにより、新学力観に迫る実践に取り組んでいた(13)。このような赤堀校長のリーダーシップのもと、1997年度より、「指導要領の改定に対応するため、城下町に誇りと愛着を持ち、具体的に『まちづくりの提案ができる子どもの育成を目標』(14)にして、「町づくり総合学習」のカリキュラム開発に取り組んでいたのである。

第2に、寺本潔 (当時：愛知教育大学助教授、現：東京成徳大学特任教授) より継続的に指導助言を受けたためである。赤堀は、1996年度の秋頃、豊田市立元町小学校の『町おこし総合学習』(15)を推進してきた寺本を訪問し、「城下町西尾の町づくりを児童らの学習に活用できないか」(16)と話を膨ませたという。1997 (平成9)年1月30日に開催した生活科の校内授業研究会では、現職教育の講師として寺本を招聘し、城下町の授業構想について研修するとともに、次年度の「町づくり総合学習」の研究方向を確認している。そして、「本校は、文部省の研究開発校ではないため、現行の学習指導要領の中で研究しなければならないという条件がある」(17)として、寺本より継続的に指導を受けることを決めたという(18)。

第3に、教師たちによる主体的なカリキュラムづくりの取り組みが現れたためである。1997年5月23日、西尾市青年の家で開催された第1回「町学習セミナー」では、参加した教職員同士で、「授業が2倍面白くなる町学習とは」について意見を出し合い、総合的学習としての「町学習」のあり方について考えていった。そうした取り組みの過程の中で、教師たちは見通しを持って教材研究に取り組むようになり、単元修正に向けての意識も向上していったという。1998 (平成10)年度には、2年間の取り組みを振り返り、「本校は、指導要領の改定に対応するため、城下町に愛着と誇りを持ち、具体的に『まちづくり』の提案ができる子どもの

育成を目標に総合学習の立案に取り組んでいます。具体的には、『総合学習』を単独に扱うのではなく、他の教科・領域と関連を図り、クロスカリキュラムの考え方を取り入れ、総合的な学習を実践するなかで、総合学習と教科・領域の年間カリキュラムづくりをこれから進めていこうと考えています⁽¹⁹⁾と述べている。

小括すると、西尾小が「町づくり総合学習」へ着手した背景には、2002年度からの小中学校の学習指導要領改定に一般の公立小学校として対応するために、赤堀校長のリーダーシップが存在していたことや、寺本より継続的に指導助言を受けたこと、教師たちの主体的なカリキュラムづくりの取り組みが現れたことが要因としてあったのである。

3. 西尾小のクロスカリキュラム開発の論理

(1) 「参画のはしご」論

西尾小の共同研究者であった寺本は、ニューヨーク市立大学の環境学者ロジャー・ハートによる「参画のはしご」論⁽²⁰⁾を教職員に紹介した。「参画のはしご」論とは、一段目を「繰り参画」、二段目を「お飾り参画」、三段目を「形式的参画」、四段目を「与えられた役割の内容を認識した上での参画」、五段目を「大人手動で子どもの意見提供ある参画」、六段目を「大人主導で意思決定に子どもも参画」、七段目を「子ども主導の活動」、八段目を「子ども主導の活動に大人も巻き込む」というように、子どもの社会参画を段階的に示したものである。この「参画のはしご」論をもとに、西尾小では、「町づくり総合学習」における子どもの「参画」を位置づけていった⁽²¹⁾。

西尾小では、「町づくり総合学習」における子どもの「参画」について、子どもの発達段階と「町学習」の性格を考慮して、①愛着→②共感→③参加→④提案といった四段階の「活動ステップ」⁽²²⁾を考えていった。具体的には、①愛着 (attachment) の段階では、低学年の生活科を中心に、町の環境への親しみを深める学習を設定し、何度でも対象と関わることを通して、場所や人への親密感を強めるのをねらいとした。②共感 (sympathy) の段階では、中学年を中心に、周囲の環境に対し、主客未分化な愛着の段階から、一步、客観的に対象を見つめることのできる資質を育むことをねらいとした。③参加 (participation) の段階では、主に高学年を対象にして、「参画のはしご」の四段階以上の「与えられた役割の内容を認識した上での参画」にまで子どもを高めていくことをねらいとした。④提案 (proposition) の段階では、最終学年である6年生を対象に、「提案」能力の育成を求めた。

この四段階の「活動ステップ」は、西尾小のクロスカリキュラム開発における「単元作成のスタンス」⁽²³⁾において位置づけられていった。

(2) 「町学習の力」群

寺本は、クロスカリキュラムの考えに基づき、総合的学習で育てたい「学習スキル」群⁽²⁴⁾を打ち出した。寺本の提案した「学習スキル」群とは、A:問題発見力(自分の学びたいことを見つけ、意欲的に取り組む力) B:思考判断力(自分の考えをめぐらし、比較や価値づけ、意思決定を行う力) C:課題追究力(自分にとっての問題をしぼり、持続して調べる力) D:表現発表力(自分の調べた結果や思いを伝えることができる力) E:提案実践力(自分の考えを実際に実現の方向に向けて動き出せる力)といったように、子どもに身に付けさせたい「学習スキル」を段階的に示したものである。寺本は、この「学習スキル」について『自分づくり』と『積極性』『かかわり』という言葉を念頭においてみました⁽²⁵⁾と述べている。

次に、寺本の提案した「学習スキル」に基づいて、西尾小では、子どもたちに育みたい「生きる力」を具体的に考えていった。西尾小の教師たちは、寺本の「学習スキル」群を参考にして、子どもたちに育みたい「町学習の力」群を提案した。資料1には、西尾小が考えた「町づくり総合学習」で育てたい「町学習の力」群を示した。これらの「町学習の力」群は、「子どもたちにつけてもらいたい町学習での学習の力を分類し、レベルをつけたもの」とされ、「子どもたちの実態と単元素材の潜在能力を考えて、指導の目安」⁽²⁶⁾としたものであったとされる。

そして、「町学習の力」群を目安にして、表1のように各学年の目指す子どもの姿としての「人や町との関わり方」が構想されていった。「人や町との関わり方」は、「活動ステップ」や「力群の程度」を踏まえ、目指す具体的な子どもの姿を表したのであった。こうした「人や町との関わり方」の実現を目指し、各学年で「町づくり総合学習」の指導が取り組まれていった。

(3) 教科との共振

次に、西尾小では、四段階の「活動ステップ」や、育てたい「町学習の力」群に従って、各学年の「町づくり総合学習」におけるクロスカリキュラムの「内容構成」を考えていった。表2は、各学年の「町づくり総合学習」の「内容構成」を示したものである。

表2からは、各学年の「町づくり総合学習」と関連して、教科の学習が関連づけられていたことがわかる。当時の研究紀要は、「本校は町学習をクロスカリキュラム・テーマで実践しているために必要となってくるが、総合的学習が本格実施されても、教科との関連は重視しなければならない。ここには、生活科・社会科を中心にあげているが、他教科、道徳や特別活動、行事との関連も大切である」⁽²⁷⁾と述べている。すなわち、クロスカリキュラム・テーマに基づく問題解決の過程が重視されていたことが分かる。

資料1 「町づくり総合学習」で育てたい「町学習の力」群

① 問題を発見する力	A 対象や事象を認識することができる。 B 疑問や不思議だと思ふことを自覚することができる。 C たくさんの疑問の中から、やりたいことを見つけることができる。 D 追究したい課題を決めることができる。
② 調べる力	A 直接見たり、触れたり、五感を使って調べることができる。 B 知りたいことを、家族や地域の人に聞くことができる。 C 目的にあった対象を見つけ、必要な情報を得ることができる。
③ 考え、判断する力	A 身近な事象を主體的に捉え、夢中になる。 B 一つないし二つの事象を客観的、具体的に捉えることができる。 C 複数の事象を比べることができる。 D 複数の事象を多面的に捉え、総合的に考えることができる。
④ 表現する力	A 見つけたことを、絵やことばに表すことができる。 B 見つけたことを紙芝居、絵本、ペープサート、劇などにして、身近な人に自慢することができる。 C 調べたこと、考えたことを簡単なポスターや図、グラフを取り入れて、わかりやすく発表することができる。 D ポスター、模型や情報メディアを使って、聞き手を納得させる発表の仕方を工夫することができる。
⑤ 活かす力	A 町の中に好きな人や場所を増やそうとする。 B 町の様子や人を見つめようとする。 C 町や社会をより良くしようと提案する。 D 自分の考えを実践しようとする。

(愛知県西尾市立西尾小学校『研究概要～総合的学習～町に親しみ、町と高め合う子どもの育成』第1集, 2000年, 13頁)

表1 「町づくり総合学習」における「人や町との関わり方」

学年	人や町との関わり方
1-2	見つけたことを自慢する。 ・ 町のよさ、おもしろさを五感を通して直感的につかむ。 ・ 町の人に元気よくあいさつする。 ・ 見つけたことを、身近な人に自慢する。
3-4	調べてまとめて、知らせる。 ・ 関心のある事柄を人に聞いたり、わからないことを質問したりする。 ・ 町について調べたことや考えたことをわかりやすく町の人に発表する。
5-6	調べて、考えて、提案する。 ・ 自分の目的の情報を得るために、適当な人や場所を捜して、訪ねたり、話をする。 ・ 礼儀正しく、表情豊かに人に接する。 ・ 町の人に取材結果を発表したり、自分の考えを提案する。

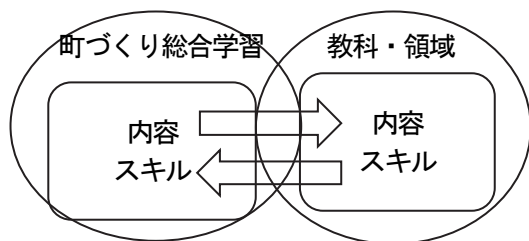
(愛知県西尾市立西尾小学校『研究概要～総合的学習～町に親しみ、町と高め合う子どもの育成』第1集, 2000年, 13頁)

表2 「町づくり総合学習」の内容構成

学年	内容構成
1-2	・ 生活科の「通学路探検」「まち探検」「公園探検」「子ども祭り」「民話づくり」の機会を生かし、校区の環境との関わりを深めて、「西尾の町」の中に自分の気づきのある場所、愛着のある空間や人を見つけていく。 ・ 「西尾の町」の自然に親しみ、自分の生活に取り入れようとする。
3-4	・ 社会科の「学校のまわりのようす」「かわってきた人々のくらし」「わたしたちのくらし」、理科の「生き物や河川のしくみ」などの単元を生かして西尾の町を調べることにより、人々の生活や自然を多面的にとらえる。そして、事実に基づいて「こんな町にしたいな」という願いを発表する。
5-6	・ 社会科の、「伝統工業」や「江戸時代」「近代」の歴史の単元を生かし「城下町」としての西尾を意識できるようにして、特徴をとらえた町自慢や将来に残したい町を構想する。また、政治の仕組み、人権(福祉)などの単元を生かし、自分たちの将来住む町を現実的にとらえ、今の町をどう変えていったらいいかという提案をする。 ・ 西尾の町のことだけでなく、住環境という視点での視野を広げていく。

(愛知県西尾小学校『研究概要～総合的学習～町に親しみ、町と高め合う子どもの育成』第1集, 2000年, 12頁)

図1 教科との共振



(愛知県西尾市立西尾小学校『研究概要～総合的学習～町に親しみ、町と高め合う子どもの育成』第3集、2002年、8頁)

また、問題解決の過程では、図1のように「町づくり総合学習」の単元と教科・領域の学習の両方で「内容スキル」を意図的に共振させることが目指されていた。教科で学んだ「内容スキル」を、「町づくり総合学習」で応用発展させ、「生きて働く力」として活用させようとした「内容構成」のスタンスが分かる。例えば、第6学年の場合、社会科「みんなの願いを実現する政治」で学習した「学区に町づくりに努めるワーキンググループの人たちがいることを知る。また、その人たちが行政に働きかけていることを知る」という「内容スキル」は、西尾の町改造計画に生かすための手立てとして位置付けられていた。このように「町づくり総合学習」は、児童にとって多様な「学習スキル」の習得に成果があったといえる⁽²⁸⁾。また、「教科との共振」

を大事にする「内容構成」は、「国、算数は絶対手を抜かない」⁽²⁹⁾という教科指導にもつながっていた。

4. 単元レベルでのクロスカリキュラム開発の実際

(1) 第5学年単元「はとみそを広げよう」の場合

では、「町づくり総合学習」の単元レベルでは、具体的にどのような目標が設定され、どういった「人や町との関わり方」の育成が目指されていたのか。ここでは、特色ある単元として、1999年度の第5学年単元「はとみそ（筆者註：西尾市にある味噌、醤油蔵元である「はとや」のみそ、以下、はとみそ）を広げよう」に着目する。

本単元のねらいは、「はとみそについて調べることにより、西尾の町の産業に興味と愛着を持ち、それを大切にし、広めようとする。また、西尾の元気人を調べることにより健康的な生活に関心を持ち実践しようとする。そして、地元の伝統産業の一つであるはとみそを広げていくための方法を考え、提案しようとする」⁽³⁰⁾と述べられている。単元の計画段階では、「人や町との関わり方」として、「はとや」に「興味」と「愛着」をもち、「はとみそ」を広げていくための方法を「提案」することまで目指されていた。

表3には、単元の展開を示した。ここからは、次の二つの特徴を指摘することができる。

表3 単元「はとみそを広げよう」の展開（75時間完了）

段階	学習活動・時間数	教科との関連
7時間 導入	食事を調べてみよう①	(家庭科) なぜ食べるのだろう
	「はとや」のみそを食べてみよう②	(行事) 自然学習
	「はとや」を見に行こう④	(社会) わたしたちの生活と工業生産
16時間 はとみそを探ろう	はとみそをくわしく調べてみよう⑧	(社会) わたしたちの生活と工業生産、(家庭科) 毎日の生活と食物、(国語) 見学記録、(行事) 社会見学
	探ったことを知らせよう⑧	
2時間 追究Ⅰ	はとみそをしこもう②	(家庭科) 気持ちよく生活するために、(社会) わたしたちの生活と工業生産
7時間 はとみそをきく	長寿さんの食生活を知ろう②	(社会) わたしたちの生活と工業生産、(家庭科) 毎日の生活と食物、(保健) 健康な生活、(道徳) 節度・節制、(学活) 健康・安全
	長寿さんの秘訣を探ろう③	
	西尾のきんさん・ぎんさんになろう②	
18時間 追究Ⅱ	大豆から豆腐を作ろう④	(家庭科) 毎日の生活と食物
	みそのできるまでを観察しよう⑩	(理科) 自由研究
	他の工場と比べてみよう④	(社会) わたしたちの生活と工業生産
25時間 はとみそを広げよう	身近な人にはとみそのよさを知ってもらおう⑦	(社会) わたしたちの生活と情報、(家庭科) 毎日の生活と食物、(国語)、見学記録(国語) 森林のおくりもの
	はとみそを広く知ってもらおう⑱	

(西尾小学校『カウントダウン2000 総合学習ふぉーらむ in 西尾 指導案・資料』2000年、21-26頁より筆者作成)

第一に、単元の中で、「はとみそ」に対する問題解決学習を通じて「学び方」の習得が目指されている点である。例えば、「めざせ！西尾のきんさん・ぎんさん」の段階では、「長寿さんの秘訣を探ろう」といった「学び方」の習得を目指した調べ学習が位置づけられている。こうした「学び方」の習得を目指した調べ学習について、「全員が共通の事象に焦点をあて、子どもたちの興味に応じた追究をしていくことで、一つの事象が多面的に追究できることを子どもたちに気づかせたいと考えた。また、深くまで一つの事象を追究することにより、追究する方法いわゆる学び方を身につけさせようと考えた」⁽³¹⁾と捉えていた。すなわち、5年生全体での一つの事象に対する問題解決学習を通じて「学び方」の習得が目指されていたのである。

第二に、単元における全ての学習活動に、「教科スキル」の活用が位置づけられている点である。具体的には、「身近な人にはとみそのよさを知ってもらおう」の学習では、(社会)「私たちの生活と情報」の学習が関連付けられているが、これは、「社会科で、自分で調べたことを、いろいろな形で発信することを学ぶ。町学習で調べたことから、伝えたいことをまとめインターネットを使った掲示板やテレビ会議をはじめ、いろいろな形で情報を発信するであろう」⁽³²⁾といった「教科スキル」の活用として想定されていた。このように、社

会科の学習を通じて獲得した情報発信の「教科スキル」を、「身近な人にはとみその良さを知ってもらおう」といった「提案」に生かすことが考えられていたのである。

したがって、第5学年単元「はとみそを広げよう」の場合では、西尾の町に生き続ける「はとみそ」への追究を通じて、「学び方」の習得と、「教科スキル」の活用が目指され、「はとや」に「共感」し、もっと有名にしようという思いを持って「提案」することにより、町づくりに「参画」をする子どもの育成を目指していたことが明らかになる。

(2) 第6学年単元「西尾『MATCH』改造計画」の場合

次に、特色ある単元として、1999年度に取り組みされた第6学年単元「西尾『MATCH』改造計画」に着目する。本単元のねらいは、「自分たちの住む町を福祉や住環境の視点で調べることにより、町に親しみ、町をより良くしようとする」⁽³³⁾と示されている。単元の計画段階では、「福祉」や「住環境」の視点から「町に親しみ、町をよりよくしようとする」という「人や町との関わり方」が目指されていた。

表2には、単元「西尾『MATCH』改造計画」の展開を示した。ここからは、以下の二つの特徴を指摘することができる。

表4 単元「西尾『MATCH』改造計画」の展開 (75時間完了)

段階	学習活動・時間数	教科との関連
行事	京都・奈良を訪ねよう (修学旅行)	(社会) 日本の歴史, (国語) 正倉院とシルクロード, (行事) 修学旅行
43時間 町かどウォッチング	校区の歴史を訪ねよう⑥	(社会) わたしたちの町の歴史探検, (国語) 心をひかれた人物について紹介しよう
	額縁美術館を開こう④	(図工) わたしだけの空と風
	気になるものをウォッチング!⑤	(図工) あれれ?ホラネ!, (社会) 日本の歴史, (社会) 社会見学
	点検!わが町西尾⑬	(道徳) 尊敬・感謝・報恩, (家庭科) 心のつながりを深めよう, (社会) 私たちの生活とくらし
	西尾城下町物語—未来—⑫	(音楽) 情景と音楽, (国語) 伝えたいことがはっきり表れるように, (行事) 学芸会
32時間 西尾MATCH改造計画	全国に広めよう小京都「西尾」③	(国語) 研究したこと, (家庭科) 住まい方の工夫をしよう, (図工) 12歳のわたし
	西尾をアピールしよう⑥	(国語) 自分新聞づくり
	町改造計画を立てよう⑥	
	ポスターセッションをしよう②	(国語) 計画を立てよう
	町に提案しよう⑥	(社会) 私たちの生活とくらし
	考えようパステルシティ西尾⑥	(国語) 計画を立てて話そう
	私たちがつくるこれからの西尾③	

(愛知県西尾小学校『カウントダウン2000 総合学習ふぉーらむ in 西尾 指導案・資料』2000年, 27-32頁より筆者作成)

第一に、単元の中で、自分たちで考えた「町改造計画」をもとに、ポスターセッションを通じて町の人に「提案」し、町づくりに「参画」する学習活動まで取り組まれていたことである。そうした学習の結果、市の活性化プランを駅前直接市民にインタビューしたり、市役所に調べに出向いたりする子どもも現れたという。前年度の反省において、「今回は、提案までで単元を終了したが、提案を実現させる方法までを追究させられないだろうか。市役所や町の人に働きかけるための方法や、その実践までを追究できる子どもたちの意欲を駆り立てることが、この単元の最終形なのではないだろうか」⁽³⁴⁾と述べられていた。そこで、単元の流れを修正し、「提案」のみで終わるのではなく、子どもたちが市役所や町の人に働きかける「参画」の行動を含んだ学習活動が展開されたのである。

第二に、教科で学んだ内容（「教科スキル」）を応用発展させ、「町づくり」への「提案」や「参画」において活用していた点である。例えば、「校区の歴史を訪ねよう」において、(国語)「心をひかれた人物について紹介しよう」の学習が関連付けられている。これは、「気に入った作家の紹介文を、聞き手にわかりやすい口頭発表原稿に書き換える。口頭発表原稿の書き方を身につける」⁽³⁵⁾といった「教科スキル」として、「町づくり」に向けて「提案」や「参画」することが目指されていたためである。

したがって、第6学年単元「西尾『MATCH』改造計画」の場合には、「町改造計画」の「提案」や「参画」のために、「教科スキル」を活用し、「人や町との関わり」を通じて、「町づくり」に「提案」や「参画」する子どもの育成を目指していたことが明らかになる。

5. 研究の成果と課題

本稿の分析結果は、以下三点に整理できる。

第一に、西尾小の「町づくり総合学習」におけるクロスカリキュラム開発の背景には、赤堀校長のリーダーシップのもと寺本より継続的に指導を受けたことや、教師たちの主体的な取り組みがあり、町づくりへの「子どもの参画」や、目指す具体的な子どもの姿としての「人や町との関わり方」の実現と結びついていたことである。西尾小では、ロジャー・ハートの「参画のはしご」論をもとに、愛着→共感→参加→提案といった四段階の町づくりへの「活動ステップ」を考えていた。また、寺本の提案した「学習スキル群」を参考にして、独自に、子どもたちに育みたい「町学習の力」群を考え、目指す具体的な子どもの姿としての「人や町との関わり方」の実現を設定していた。そのような「活動ステップ」や「人や町との関わり方」の論理に基づいて、「町づくり総合学習」におけるクロスカリキュラム開発が行われていたことを明らかにすることができた。

第二に、西尾小の「町づくり総合学習」におけるクロスカリキュラムの論理は、各学年の単元レベルで、「学び方」の習得や「教科スキル」の活用が位置づけられていたことである。第5学年単元「はとみそを広めよう」の場合には、「はとみそ」に対する問題解決学習を通じて「学び方」の習得が目指され、全ての学習活動に、「教科スキル」の活用が位置づけられていた。第6学年単元「西尾『MATCH』改造計画」の場合には、自分たちで考えた「町改造計画」を、町の人に「提案」し、町づくりに「参画」する学習活動が目指され、「教科スキル」の習得が目指されていた。そうした「学び方」の習得や「教科スキル」の活用を目指して、各学年で「町づくり総合学習」における単元の「内容構成」が考えられ、「教科との共振」を意識した指導が取り組まれていたことを明らかにすることができた。

第三に、西尾小の「町づくり総合学習」のクロスカリキュラムの実際として、「町づくり」を目指した問題解決学習によって、子どもの社会参加が促されていたことである。第5学年単元「はとみそを広めよう」の場合には、「はとや」に「共感」し、「はとみそ」をもっと有名にしようという思いを持って「提案」することにより、町づくりに「参画」をする子どもの育成を目指していた。第6学年単元「西尾『MATCH』改造計画」の場合には、「町改造計画」の「提案」や「参画」のために、「教科スキル」を活用し、「人や町との関わり」を通じて、「町づくり」に「提案」や「参画」することを目指していた。子どもたちは、「町づくり」という共通のテーマに基づく問題解決を通じて「提案」や「参画」を行い、社会参加を実現していたことを明らかにすることができた。

西尾小の「町づくり総合学習」が示唆するのは、時間をかけて、総合的学習のカリキュラムの基盤を構築していく必要性である。見てきたように、分析したカリキュラムには、複数の論理・基盤が存在していた。これは、総合的学習ゆえに、自然なことといえる。だからこそ西尾小では、赤堀校長や寺本がリーダーシップを取りつつも、複数の論理・基盤を共有することに時間をかけていた。その共有の仕方も、教える一教えられるという共有の仕方ではなく、共に考えるというものであった。これは、子どもの社会参加を促すために、まずは教師のカリキュラムへの参加を促し、すべての人々が参加する構造が設計されていくべきという意図があったと解することもできる⁽³⁶⁾。そしてこの構造ができるためには、時間を要することをリーダーシップ陣が理解していたと予想できる。このようなカリキュラムづくりの過程に関する諸条件は、今後、社会参加を促す総合的学習の1つの指針となるのではないかと。

本稿では、総合的学習におけるクロスカリキュラム開発の論理と実際について、西尾小の「町づくり総合

学習」の事例を基に明らかにした。今後は、他校の総合的学習におけるクロスカリキュラム開発の事例に関する知見を深めていく必要がある。

〈注〉

- (1) 本稿では、「社会参加」と3章以降に登場する「社会参画」を同様の概念として扱う。
- (2) 田中博之『改訂版 カリキュラム編成論—子どもの総合学力を育てる学校づくり』放送大学教育振興会, 2017年, 206頁。
- (3) 高階玲治編『実践 クロスカリキュラム—横断的・総合的学習の実現に向けて—』図書文化, 1996年。
- (4) 今谷順重編著『横断的・総合的な学習とクロスカリキュラム—新しい問題解決学習のストラテジー—』黎明書房, 1997年。
- (5) 田中博之『総合的な学習で育てる実践スキル 30 知る, 創る, 表わす, 関わる, 律する力』明治図書, 2000年。
- (6) 本稿では, 総合的な学習の時間の創設期を, 学習指導要領の改訂によって小中学校において実施が提起された1998(平成10)年12月から全面実施までの2002(平成14)年3月の期間として定義する。
- (7) 寺本潔・愛知県西尾小学校『総合的学習への挑戦 15 総合学習・町づくり大作戦』明治図書, 2001年, 24頁。
- (8) 嘉納英明「まちづくり総合学習に関する事例的研究」『琉球大学法文学部紀要 人間科学』第13号, 2004年, 120頁。
- (9) 寺本潔「生活科・総合的学習と町づくり学習」日本生活科・総合的学習教育学会編『生活科・総合的学習事典』溪水社, 2020年, 146頁。
- (10) 唐木清志『子どもの社会参加と社会科教育—日本型サービス・ラーニングの構想—』東洋館出版社, 2008年。
- (11) 長瀬拓也『社会科でまちを育てる』東洋館出版社, 2021年。
- (12) 小栗優貴『子どもの社会参加をいかにエンパワーするか—達成カリキュラム研究の導入—』(広島大学大学院博士学位論文) 2022年。
- (13) 西尾市立西尾小学校『錦が丘紀要』第10集, 1996年3月31日, 2頁。
- (14) 西尾市立西尾小学校『錦が丘紀要』第11集, 1998年3月24日, 「はじめに」の頁。
- (15) 寺本潔・豊田市元城小学校『総合学習への挑戦 1 町おこし総合学習の構想—ポスター・セッションの試み』明治図書, 1997年。
- (16) 「子供たちに城下町への愛着を」『中日新聞』1997年5月24日付, 西三河版記事
- (17) 西尾市立西尾小学校『錦が丘紀要』第12集, 1999年3月31日, 「はじめに」の頁。
- (18) 当時の校長・赤堀隆氏への聞き取り調査より(2020年3月3日実施, 於:西尾市立西尾小学校校長室)。
- (19) 赤堀隆「はじめに」研究代表 寺本潔『子ども参加の「町づくり学習」』(平成9年度日本児童教育振興財団研究助成報告書) こどもの町研究会(西尾市立西尾小学校), 1998年, 5頁。
- (20) ロジャー・ハート著, 木下勇, 田中治彦, 南博文監修, IPA 日本支部訳『子どもの参画—コミュニティづくりと身近な環境ケアへの参画のための理論と実際—』萌文社, 2000年, 42頁。
- (21) 当時の研究主任・柴田幸夫氏からは, 聞き取り調査に答えて, 「参加のはしご」論が, 「町づくり総合学習」の「骨格」となっていたことを教えていただいた(2020年3月3日実施, 於:西尾市立西尾小学校校長室)。
- (22) 寺本潔『総合的な学習で町づくり—「町」をトピックスにした学習の各教科関連領域—』明治図書, 2001年, 34-40頁。
- (23) 愛知県西尾市立西尾小学校『研究概要—総合的学習—町に親しみ, 町と高め合う子どもの育成』第1集, 2000年2月4日, 12-13頁。
- (24) 注11, 19-21頁。
- (25) 同前, 同書, 21頁。
- (26) 注23, 12頁。
- (27) 同前, 同書, 同頁。
- (28) 寺本潔『『町学習』でめざす総合的な学習の可能性と子どもの参加する町づくり』『やってみよう総合学習⑦ 町・地図 ぼくたちの町改造計画』草土文化, 2001年, 54頁。
- (29) 愛知県西尾市立西尾小学校『研究概要—総合的学習—町に親しみ, 町と高め合う子どもの育成』第3集, 2002年, 43頁。
- (30) 『カウントダウン 2000 総合学習ふぉーらむ in 西尾 指導案・資料』主催 西尾市教育委員会・西尾市立西尾小学校, 2000年, 21頁。
- (31) 注17, 41頁。
- (32) 注29, 26頁。
- (33) 注30, 27頁。
- (34) 注17, 56頁。
- (35) 注29, 29頁。
- (36) 「町づくり総合学習」の①愛着→②共感→③参加→④提案といった四段階の「活動ステップ」は, 現在の西尾小の単元構成にも引き継がれている。